

新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 里 隆光

平成二十三年を迎え、謹んでお祝辞を申し上げます。

旧年中は当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の史跡見学会・研修などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も各方面より注目を浴び、昨年度の協会へのご来訪者は、県内外から三千人を超えました。また、平成元年以来発刊してまいりました、特集「ながさきの空」も本年で第二十二集となります。

本年も「長崎学」を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の振興に貢献したいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

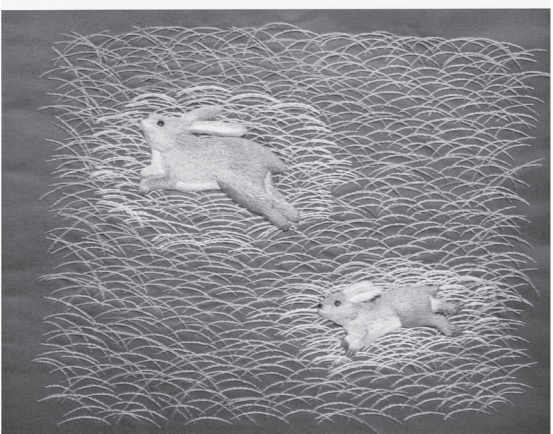
平成二十三年

卯（兔）年に因んで

越中 哲也

謹んで新年の賀詞を申し上げます。本年も亦よろしく御教導の程お願い申し上げます。

今年も古代中国の暦法によると「壬卯の年」と記し、我が国では之を「ミズノエ ウサギの年」と読んでいます。壬は十干の第五の文字であり、卯は十二支の第四の文字である。十干の干とは幹の事であり、十二支の支は枝である。「史記」によると両者は母と子の関係であると記してある。十干の起源については人間生活の基本の事である。「木火土金水」の五行にはじまり、之に強（兄）と弱（乙）をつけて十干を造り、十二支は天体の十二辰によつていと説明されている。この十二支の文字が何故多くの動物の中より「子の文字に鼠」をあて、「丑の文字に牛を当てる」と言う事については不明であると記してある。



長崎刺繍 兔（県指定無形文化財 嘉勢照太氏製作）

嘉勢氏は、昭和57年に長崎市の八田刺繍店（八田桂次）に入門し、長崎刺繍の技術習得に努め、平成7年、自宅に「長崎刺繍工房」を設立。長崎くんちの衣装の修理や製作、傘鉾の垂れ（たれ）の復元を行う。以来長崎刺繍の技術を復活。日展に4回入選。平成22年3月長崎県指定無形文化財「長崎刺繍」技術保持者に指定された。

今人見ず古時の月……

次に我が国で兔の話と言えば「古事記」にてくる次の話は有名で今も童話としても広く語られている。

其の八十神 各 稲羽（因幡）の八上比賣を婚はむ心の心ありて共に稲葉に行ける時、大穴牟遲神（後の大国主神）に袋を負せ従者として往きぬ。氣多に到りける時、赤裸なる菟：泣き伏せければ最後に来ませる大穴牟遲神その菟を見て「何故、汝泣き伏せる」と問い給ふに「僕・淤岐の島にありて此の地に渡らまく欲りつれども渡らむ因なかりし故、海のと漕を欺き、吾れ汝と族の多少を競べん、汝その族を悉くひき来り此の島より氣多の前まで列み伏せよ吾れ其の上を踏みて走りつつ読み渡らむ吾が族と何れが多きと知らむ：吾れ其の上を踏み読み渡り地に下りむとする時、吾れ汝を欺きぬ」と言う。この時、最端にいた和邇われを捕え悉く我が衣服を剥ぐ、此により泣き思ふ。この時、先に行かれた八十神達が「潮を浴み風に当りてよしと誨。故に教の如く爲せしに身悉く傷む。ここに大穴牟遲神・菟に教う今いそぎ水門に往き、汝身を洗い蒲黄を取つて敷き其の上に輾轉せば本膚の如く必ず愈えなむ。故に教の如く爲し其の身本の如し。此を稲葉の素菟」といひ今に於て菟神と謂也。

本年の壬の文字は「壬は任なり」と記す。「陽気なり、万物を下に任養す」と記してあるので今年には、「暖かい日のもとに成長する年」と考えて良いようである。また卯の文字は「説文」によると「萬物地を冒して出るの形」とあり、「万物が茂る」意味と解説し、卯の文字を動物に当てると兔になると記してある。

すると、「壬卯の年」とは、文字より考えると「生き生きと伸びる文字が当てはまる年という事になるので「善い事が大いに伸びる年」と考えてよいようである。

さて、兔の文字について中国ではトまたはツと読み菟と書き、日本ではウサギと読んでいます。字の型は上部は頭をあらわし、下は踞つて尾を出している姿をあらわし、兔は月を見て「有子」と解説されている。

その兔についての熟語は多い。私達が日常に使用する言葉としては「兔角」という言葉がある。この語について中国の古書「述異記」には次のように記してある。

殷紂の時、大亀・毛を生じ、兔・角を生ず、是れ甲兵まさに興らんする兆也。

この語の註記をみると、兔に角が生え、亀に毛が生える事は考えられぬ事・有る不可こと。更に之より転じて「ややもすれば」という意味もあると記してある。

次に中国の説話の中に「日（太陽）の中には三ツ足の鳥がおり、月の中には兔が住み葉を搗いている」と言う。その兔は嫦娥というのである。嫦娥は美しい女で仙女西王母に仕えていたが其の後、不死の薬を得て月に登り、今も其処で薬を杵で搗いているというが、我が国では兔は餅を搗いていると言う。その嫦娥は唐の詩人李白の詩「月に問う」の中にも登場している。

青天 月あつてよりこのかた幾時ぞ 我れ今、盃を停めて一たび月に問う…… 白兔・葉を搗く秋また春 嫦娥孤栖す 誰と共にか鄰せん

萬葉集の中にも兔をよんだ次の歌が巻十四にあると教えられた。

等夜の野に乎佐藝ねらはり をさをさも 寝なへ兒ゆえに母に嘖ばえ (定本萬葉集三三二九)

兔はウサギと言う処もあつたのであろう。縄文時代より兔は食用として活用されていたと考古学の食文化研究に記してあるし、平安時代には「兔醢」という料理が「延喜大膳式」にあると記されている。兔は食用としても活用されていたと思うが、絵画としては「月に兔の図」があり「十二支の図」の中に描かれているが、竜虎のように単独で描かれているものは少ない。

私達は戦前、中学校の冬の行事として毎年学校をあげて甕岩（山）の下の野原に集合し、山頂めがけて「兔がり」に行つた事がある。

そして姉兄達が大雪のときには、大きな白兔を雪で造り、南天の葉を耳に赤い実を目にはめていた事も思い出している。

さて、最後に萬葉集を見ていたら、萬葉集の最後尾（二十巻）に因幡の白兔にも関係のある次のような目出度い歌に出あつた。

三年春正月一日 於因幡國廳 賜饗國郡司等之宴歌一首

新しき年の初めの初春の 今日降る雪の いやしけ吉事

右 一首大伴家持宿弥作之

三年春と言うのは大平宝宇三年（七五九）である。家持は大伴旅人の子として大伴家の首長として又歌人として大いに名を残し養老二年（七八五）歿したと記してある。

風信

○今年の節分は二月三日、そして今年はこの日が旧暦の一月一日である。中国では此の旧暦一月一日より元宵祭が始まり長崎では新地街を中心にランタン・フェスティバルが始まる。このとき新地でつくられる中国のもちは実においしい。

○長崎の旧記を読むと、「節分の夜は先ず明りを消し『豆まき』に始まり、火吹竹に豆をつめて外に投げ、次に明りをつけて御膳につく。先ず鬼の手の赤大根の膾をたべ、金がしら、尺八いか、鯨を食べ、氏神に出かけ鬼火にあたり家に帰る。」とある。

